

二次元ぷち文庫

【小説】 上田ながの

WRITTEN BY UEDA NAGANO

【表紙イラスト】 みかん。

ILLUST BY MIKAN.

夜の 狙撃手

試し読み版

T H E S N I P E R I N N I G H T

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された『夜の狙撃手』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



夜の 狙撃手

上田ながの
表紙／みかん。

登場人物紹介

Characters

さかがみつばさ

坂上翼

二十歳。九州独立自衛軍准陸尉で狙撃の名手。夜間でも高い精度で狙撃できることから『梟』と呼ばれる。家族以上に大切なものを持たず、軍内では空を最も尊敬している。

りゅう かぎよく

劉華玉

九州独立を手助けする名目で新中華連合から派遣された大佐。見た目は十代半ばの小柄な少女だが、任務のためには手段を選ばない軍人。

くぬぎそら

功刀空

九州独立自衛軍三等陸佐。二十七歳。翼の上官の女性。劉華玉の危険性を認識し、翼に命じて彼女を暗殺しようとする。

地方分権の社会を。国を……。

このスローガンが歪曲され、崩れてしまったのが何時のことなのか？ 正確にそれを理解している人間はいない。ただ、気付いた時には日本はバラバラになっていた。

北海道、東北、北関東、南関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州、沖縄の十一道州——それらが独立を主張し、列島は戦国時代のような内戦状態となっていたのである。

*

「まったく馬鹿馬鹿しい話だ——が、この国が戦争状態にあるのは事実だ。そして戦争という現実がそこにある以上、軍人である我々は戦わなければならない。たとえそれがどんな任務であったとしてもだ。分かるな……翼」

九州独立自衛軍三等陸佐功刀空は、そのナイフのように鋭い瞳をさらに細めながら、若干溜め息混じりに呟いた。華奢な肩が力なく落ちてゐる。女らしいけれど軍人としてはやや小柄な身体が、一層小さく見えた。デスクの上で腕を組む彼女の表情はあまり冴えたものではない。

そんな空が視線を向ける先には、一人の女が立っていた。

肩口で切り揃えた黒いショートヘアーに、瑠璃色の瞳が印象的に輝く二十歳前後の女。顔立ちは端正といえるだろう。服は緑を基調とした九州自衛軍の軍服。パリッとクリーニングが行き届いた服がよく似合っている。豊かに膨らんだ胸元に、キュッと窄まった括れ、

スカートからスラリと伸びる両脚が眩しい。街を歩けば十人中九人が振り返る美貌を持っていると喋っていいだろう。ただ、彼女の持つ雰囲気はどこかただの女性のものとは違っていた。冷たさとも暗さとも違う——抜き身の刀のような危うさが感じられた。

女の名は坂上翼。九州独立自衛軍准陸尉である。

「三佐がいいたいことは分かります。今更じゃないですかそんなこと。この仕事でいいと思ったことなんかありませんよ。でも、あたしはそれを分かかっていてやってるんですから」
翼は空のボブカットを見ながら、わざと陽気に振舞ってみせた。この上官は翼より七つも年上の二十七歳であるというのに、どうにも精神的に弱い部分がある。勿論階級に見合った——いや、それ以上の能力を持つてはいるのだが、どこかで支えてやらなければいけないような気がした。だから自然と気遣うような態度が出てしまう。

「そうか。悪いな……」

気遣いに気づいたのか、空は何度か首を横に振ると、表情をきりつと引き締めた。そしてデスクから一枚の写真を取り出し、翼に差し出してくる。准尉は何もいわずにこれを受け取った。

写真に写っているのは一人の少女。年齢は十代半ばくらいだろうか？ くりくりと大きな瞳に、愛らしい唇。腰まで伸びる長い黒髪。一見すると愛玩人形のようにすら見える。が、人形というには奇妙な点が一つ。

「そいつの名は劉華玉。新中華連合新人民軍の大佐だ」

黒い軍服に、黒い軍帽を被っているという点だった。

「新人民軍の大佐？ この若さで？」

「……いわゆる天才って奴だ。なんせ八つの頃から軍に所属していたっていうくらいだからな」

「八つねえ」

まるで現実味がない。大体八つといえは妹と同一年だ——などと翼は考えてしまう。

「で、その天才がなんなんですか？」

「近々ここに来るらしい」

「ここ？ 九州独立政府にですか？」

聞き返すと空は頷き、一段と声を潜めて華玉について語った。

「表向きは九州独立の為の支援という名目での来日らしい。呼んだのは独立政府のお歴々だ。確かに私も援助を頼むという考え方自体は間違いだとは思っていない。経済面は別としても、軍事面で我々は本土の連中に劣っているからな」

「まあ、確かに本土——特に関東には馬鹿な連中がいますからね」

馬鹿な連中というのは、本土において南北関東に東海を支配する新生幕府軍のことだ。この時代に幕府などという歴史の遺物みたいな名前を引っ張り出し、強大な軍事力で各地

方軍を潰して回っている。もしその幕府軍が九州まで迫ってきたとしたら……。

「そう、お偉いさん方は勝てないと踏んだんだろうな。だが、今回は相手が悪過ぎる。中国——新中華連合が本気で九州の独立援助などすると思うか？ 有り得ない。乗っ取られるのが関の山だ」

吐き捨てるように空は毒づく。

「本土の連中から九州を守って、新中華の傘下にされるなど本末転倒も甚だしい。いや、それ以下だ。だから私は……なんとしてでも華玉をここから排除する！」

断固とした強い意思を伴う言葉とともに、空は拳を振り下ろした。デスクがダンツと音を立てる。

「……了解しました」

部屋中に響き渡った轟音にビクツと身を震わせながらも翼は頷いた。これといった命令が空の口から出たわけではない。が、翼という存在にこの上官が命ずることなど一つしかなかった。だから准尉は頷く。

「すまないな。いつもお前にはかり貧乏くじを引かせる」

「何いってるんですか。あたしは構いやしませんよ。なに、いつもと同じことをするだけです」

三佐の顔に罪悪感が浮かんでいる。翼は（ホント放っておけない人だな）などと心の中

で考えながら、ニコツと笑つてみせた。

*

——一週間後。

ショートヘアが風に揺れる。冷たい空気が肌に痛い。無機的なコンクリートの感触が、靴を通して足裏に伝わつてきていた。開けた視界の為、余計寒々しく感じてしまう。

「やつてるわね。みんな美味しそうなもの食べてるじゃない。それに引き換えあたしは何をやつてるんだか……」

九州独立政府庁舎を見下ろせる某ビルの屋上に坂上翼准尉は居た。双眼鏡を使い庁舎で行なわれるパーティーの光景を眺めて溜め息をつきながら、持つてきたトランクを開き、組み立て式のライフルを取り出した。

スナイパーライフル『翼SP』。自作の狙撃銃である。

これこそ翼が空から与えられた仕事だった。つまり——劉華玉を狙撃せよ。

銃を組み立てながら空を見上げる。緞帳のように幾重にも灰色の雲が重なっている夜空。星どころか月明かりすらない。風も強く、狙撃に適した日とはいいい難かった。

それでも翼の表情は変わらない。鼻歌を歌いながら黙々と銃を組み立てていく。

この程度の悪天候、暗闇など物の数ではなかった。これまで数えきれない程行なつてきた狙撃の中には、今夜以上に酷いコンディションの日も多々あった。それでもすべて成

「あ、いや……」

翼は男性経験というものが無い。初めて見るグロテスクな男性器を突きつけられ、身体は硬直してしまっていた。狙撃手とは思えない程の隙が生まれてしまう。これではどちらが少女か分かったものではない。

敵はそんな姿に淫蕩な笑みを浮かべると、腰を突き出し、軍服の上から翼の下腹部に肉棒を押しつけてきた。硬いペニスの感触が伝わってくる。

「さあさあ、早くしてくれないか。それとも、家族がどうなってもいいのか？」
二人の笑顔が脳裏を過ぎった。

「わ、分かったわ……」

屈辱に歯噛みしながらも、華玉の前に跪く。目の前に突き出されるペニス。肉茎に浮き上がった血管。噎せ返るような匂いに、クラクラと思考が揺れる。

「さあ、早くしてくれ」

翼が苦しんでいることは分かっているのだろうが、敵はさらなる行動を促してくる。躊躇の暇すらなかった。

（やるんだ。ほんの少し耐えるだけだ……）

相手が自分より幼い少女だということに、より強い屈辱を覚えてしまう。狙撃手は強く瞳を閉じながら、ゆっくりと肉棒に向かって手を伸ばした。

「ふっ……うんっ」

ペニスに触れる。掌に肉棒の熱が伝わってきた。じんわりと染み渡ってくるような熱気。華玉の口から甘い吐息が漏れる。

「なかなか優しい手付きだな。私の好みだよ。さあ、そのままゆっくり扱いてくれ」

少女の手が伸び、こちらの頭を撫でてきた。パリッとした軍服に包まれた身体が、一瞬であるが硬直する。触れるな——と怒鳴りつけない気持ち在必死に抑えつつ、翼は握った肉棒を抜き出した。

肉根から肉先にかけて、シコシコと上下に掌を動かしていく。何分生まれて初めての行為であり、その動きはぎこちないうえにたどたどしかつた。が、それでも——。

「ふう……ふうふう……」

一摩りするたびに、ピクンッピクンッと肉茎が反応を示す。華玉の頬も桜色に染まり始めた。吐息も荒さが増していく。軍人として鍛え上げられた手の締め上げが、少女に快楽を与えていく。肉茎を締め上げるような動きに「ふっふっ」と息を吐きながら華玉は瞳を細める。

ちゅくちゅくちゅく……。

包茎肉棒の先端から、半透明の液体が分泌され始めた。粘着質な液体が指に絡む。不快な感触だった。指と指の間に糸が伸びる。

(な、なんなのよこれは……)

口には出さず、表情だけを歪ませた。プツプツと鳥肌が立つ。本当ならすぐにでも手を離したかった。しかし、華玉はそんな翼を嘲笑う。突然後頭部に手をかけてきたかと思うと、無理矢理翼の頭を腰に向かって引つ張ってきた。

肉棒が目の前に迫る。唐突な行動に抵抗する間すらなかった。グチュリッと濡れた肉先が頬を撫でる。粘液の筋が頬に引かれた。

「ひっ！」

普段の軍人としての翼からは想像もできない程に、瞳が見開かれる。思わず悲鳴を上げて逃れようとするが、少女の腕に拘束された状況では逃れることもできない。無理矢理もがいても、その分密着した肉棒に顔を汚される結果になってしまう。

「んあっ！ はあはあ……な、なかなか気持ちがいいぞ……ふくっ！」

抵抗によって快楽を感じているのか、熱に浮かされたような声を少女が上げた。僅かではあるが、腰を前後に振ってくる。余った包皮部分が頬肉に引っかかり、べろりと剥けた。ピンク色の龟头が剥き出しになる。

「やひっ！ ひんっ！」

すると華玉は驚いたように跳ね、擦りつけてきていた腰を離してきた。普段皮を被っているせいなのか、かなり敏感らしい。ある意味この少女の弱点ともいえるだろう。

とはいえ、それに気づけるだけの余裕は翼にはなかった。

(き、汚い。こんな汚くて……臭いもの……)

必死に手の甲で顔についた粘液を拭い続ける。顔と手の甲の間に伸びる粘液の橋が、酷く惨めだった。

「……ここはデリケートなんだから、もつと慎重に扱ってくれよ。まあ、気持ちはよかつたけど……」

自分から腰を振っておいてこの言い草。かなり傲慢な人物らしい。

「……五月蠅い」

腹が立ったので言い返す。すると華玉はムツとした表情を浮かべた。

「反抗的な奴だ。どうやら身体で分からせてやらないといけないらしいな」

いうと同時に少女の手が狙撃手にかかる。そのまま少女のものとは思えない力で、ビルの屋上に押し倒されてしまった。華玉はそのまま身体を入れ替え、丁度翼の眼前に肉棒が来る位置となる。少女の頭は翼の陰部の目の前。いわゆるシックスナインの体勢だった。

「いいか、光栄に思えよ。これから私自身がお前に快楽を教えてやる。ただし、私が射精する前にイクんじゃないぞ。もしイッたら、お前の家族の命はないからな」

と、宣言するなり、華玉はこちらのスカートを捲ってくる。晒されるデザイン性の欠片もない白いショーツ。そのまま敵は陰部に顔を擦りつけてきた。

キユツと蜜壺が収縮し、ペニスを圧迫する。肉壁に押しつけられる異物。自分の膣が肉棒の形に変えられてしまうように感じた。肉茎の熱気が下腹部から全身に広がっていく。チリチリと神経を焼かれるような感覚が走り、身体中から汗が噴出した。絶頂前にも似た感覚に、だらしなく臍が下がる。

「イクなよ。はあはあ……そ、狙撃前におまつえが、イツても、こ、殺すからな……」
このまま快楽に身を任せてもいいのじゃないか？ 一瞬そんなことすら考えてしまったが、残忍な少女に逃げ道を塞がれてしまう。

「い、イか、イかないわよっ！」

慌てて強がって見せるが、紅潮しきった表情では何の説得力もなかった。

ピストンによって身体は揺れ、一向に狙いが定まらない。それでも時折スコープ内に空の姿を捉えることはできたのだが、今度は引鉄を引くことができなかつた。

（どうして？ 何でこんなことになってるのよ？ あっ！ また、また奥を突いてる。ペ、ペニスがあたしの奥を——あっあっあっ！）

まともな思考をすることさえもできない。グルグルと世界が渦を巻いているようにさえ見えた。いつしか翼は無意識の内に自ら腰を振り始める。少女の抽送に合わせ、肉棒に蜜壺を押しつけていた。

ぶじゅぐつぶじゅぐつぶじゅぐつ！

淫猥な音が激しさを増していく。音を聞いていただけで達してしまふのではないかと思つた。が、絶頂を迎えるわけにはいかない。弟妹の為にも耐え続けなければならない。

(でも、おかしく。このままじゃおかしくなる。狂う。あたしが壊れる……)

快楽神経を常に炙られているような刺激だった。膣壁が痙攣を始める。

互いの軍服同士が擦れあい、衣擦れ音が辺りに響き渡つた。漆黒と緑、二人の女軍人が絡み、交わりあう。上着の下に着込んだワイシャツには汗が染み込み、ベツタリと肌に張りつく。透けて見える柔肌が、女達の淫靡さを強調しているようだった。

「も、もう……が、我慢はやめろ！ こ、こんなに気持ちがいいんだ。じ、自分にすなつおに、なつれ……くおつ！ おつ！ し、しまつる！」

誘惑するような華玉の言葉が耳に届く。官能の悦びを含んだ声。潤みを含んだ嬌声が、さらに翼の身体を昂らせ、精神を激しく揺さぶつた。

「かぞ……くの、た、めなんだろ？ ど、どつちが大切だ？ 上官と……ん……幼い弟妹の、ど、どつちが……んんんんん」

どちらが大切なのか？ そんなことは今まで考えたことがなかった。とはいえ、いざ考えてみると答えは簡単に出てくる。

(……三佐はあたしにとって恩人だ。でも……でも……)

死んでしまった両親に託された二人と比べることなどできはしない。だから――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>